

2008年4月15日

JOMON あかでみい 山田 学C

環境問題

歴史的大局的

人間の目的の本質は、世界の進化と伝統に対応し適応し創造する人生、休養と労働において自身の体内を信頼する生活、です。

理想の生活とは何か。休養と労働において理想の姿勢動作・呼吸・食事・人間関係・精神・生活環境とは何か。

JOMON あかでみいは健康平和学の原点から環境問題について考えます。

たとえば環境問題の議論の中には、火力発電より原子力発電を販売したい経営主体が、石炭・石油・天然ガス利用の問題点を強調する商業広告も浸透しているでありましょう。

われわれはもっと歴史的大局的に環境問題を考えましょう。

それは地球表面の物理的進化ないし生物系の生理的進化ないし人間社会の認識伝統において今のわれわれの環境問題とは何か、ということです。地球表面史という過去・現在・未来において今の環境問題とは何か、ということです。

資産増殖と国民国家の軍事を目的として、そういう目的に都合のよいように地球環境を整備する方法を探している人もありましょう。しかし、資産増殖と国民国家の軍事という目的に都合のよいように地球環境を整備すること。それは不可能であると、わたくしは考えます。そういう目的にとり不都合な真実がすでに生成してきている。アル・ゴア氏とは独立に、わたくしはそう考えます。
金きんや石油や核分裂にとらわれない自由な生活とはどのようなものでしょうか。

進化

環境問題を日本民族として考える際、まず、生物学者の今西錦司による思索を継承し発達させることが良いと、わたくしは考えています。(文献 1、2、3 参照) ヨーロッパのダーウィンやマルクスらにも対抗したくて、日本民族流の生物共同体観を日本民族流に語り始めた、今西錦司です。(ただし、以下、わ

たくしの用語は今西錦司と少し異なります。)

生物系進化において、ある個体・ある種が生存してきた、生存している時間と空間。人間社会伝統において、ある個人・ある民族が生活してきた、生活している時間と空間。生存ないし生活の時間と空間に着目するのが、今西錦司的な思索です。地球表面において生存・生活してきた、生存・生活している微生物・植物・動物・人間を表象する、ということです。

地球表面を気候的季節的鉛直的に棲みわけてきた、棲みわけている模様。その壮大な模様から微細な模様までを認識する。そして生物系ないし生物種ないし人間の民族を共同体と考える。

細胞ないし細胞団は自己の代謝環境に適応します。人間という概念を発達させている生物は生活環境に認識において対応し生理的に適応します。生物ないし人間には生存ないし生活の環境に適応した生体の構造と機能があります。

かつて食物連鎖において最高階級たる爬虫類が新しい環境に適応できずに滅び、代りに食物連鎖において中間階級たる哺乳類が最高階級へ進化した際、哺乳類という生物種全体が一斉に進化したようです。新たな最高階級への共同体です。哺乳類内部において先進的な個体と後進的な個体はあったろうが、新しい環境に適応できる一部の個体のみが生存し、あとの多くの個体は死亡した、ということではないようです。ダーウィンの適者生存、生存競争という発想は、資本制社会における諸個人の資産増殖競争や、一方、人間の都合のよいように他生物を交配させ品種改良をしようとする試みが、影を落しているかもしれせん。

ある生物種の大きな遺伝子進化は、つまり、ある生物種の中の各個体の中の各細胞の大きな遺伝子進化は、その生物種がその生物種の大きな環境変化に調和し安定していく方向において、ほぼ一斉に起ったのでありましょう。

進化でなく病理ですが、人間などの生体の一部において常態細胞が酸素不足などの代謝環境に適応し病態細胞に転化したのがガン細胞でしょうか。その際に遺伝子の変化もあるのでしょうか。人間個人としては呼吸が楽であり脈がととのい気分がよいという健康要点の点検に不備があったのでしょうか。ガン細胞という病態細胞はいわば別種生物的細胞の生成ですが常態細胞と同居もできるようです。その病態細胞の代謝環境を常態細胞向きにもどすならその病態細胞は縮退するようです。ただし、別種生物的細胞の生成により全身において免疫力その他の生体防御力が低下し媒介的に死に至ることもあるようです。ガン細胞の生成が直接的に死の原因であることはむしろ少ないようです。

生物種の進化には適応のみでなく過適応というものもあります。有意義な適応のための路線を変更できず無意義な進化に転化するという事態です。かつてマ

ンモスは牙が発達しすぎて曲ってしまい、結局、何の役にもたない牙となりました。これを種の老化と言うこともできるでしょうか。

人間社会という特異な生物系の場合は、民族・国家の道具の進化がそれにあたります。今の USA の過剰な不換ドルの預金・現金や軍事ないし軍需産業は、あるいは過適応としての道具、あるいは民族・国家の老化と言うこともできるのでしょうか。

人間は、諸国家の統治領域として地球表面を棲みわけていますが、海流や気流の壮大な運動は諸国家の統治領域と無関係にあります。まして日本国内における諸省庁の行政分野の“棲みわけ”と無関係にあります。環境問題を解決していく基本は、脱国家の道徳運動ないし経営運動であり、その必要にあわせて諸国家の法律や条約を修正していく、ということでありましょう。

環境問題は人間社会という生物系が闘争社会から調和社会へどう進化できるかという問題です。そういう認識と労働の問題です。人間社会という特異な生物系が前史から本史へ転化する進化です。

環境と主体

今西錦司は主体の環境化と環境の主体化という論理を唱えました。これを環境と主体の相互浸透と言い直すことができます。わたくしは今西錦司に学び、環境問題を健康平和に解決していく原理を、以下のように規定します。

環境問題を健康平和に解決していく原理は、主体を健康に環境化し環境を平和に主体化していくことです。環境と主体の健康平和な相互浸透です。

まず個人を健康に社会環境化・自然環境化し社会環境・自然環境を平和に個人化していくことです。自然環境・社会環境と個人の健康平和な相互浸透です。

次に民族を健康に社会環境化・自然環境化し社会環境・自然環境を平和に民族化していくことです。自然環境・社会環境と民族の健康平和な相互浸透です。

そして人間社会を健康に自然環境化し自然環境を平和に人間社会化していくことです。自然環境と人間社会の健康平和な相互浸透です。

さて、人間の主体性の発達はすなわち健康平和な現実論の発達です。

現実論は以下のように発達させます。

人間による認識は世界の各分野の現象・構造・本質に対して未知あるいは架空論を有している部分があります。そういう認識のままに感覚的にか表象的にか概念的にか世界の問題部分に対して予想し予想の正否を実験ないしは実践により確認します。そうしてしだいに未知を既知にし架空論を現実論に再編していきます。現実論は予想実験により発達させます。具体的には教育学者の庄司

和晃氏の著作を参照してください。(文献8など)

以上のように現実論を発達させる過程を健康平和に進めます。それが人間の主体性です。

健康平和についてのわたくしの見解は本稿と同じく JOMON あかのみいサイトの「理念集」画面にある 健康生活への道 その他を参照してください。

たとえば日本文化において「雪月花」とか「花鳥風月」とか言います。月の美しさ・雪の美しさ・風の美しさ・花の美しさ・鳥の美しさなどを理解する自然と人間の認識構造論・生理的構造論・物理的構造論を深めていきたいものです。そしてそれが日本民族としての環境問題への出発点であると想います。(文献8 p163 ~ 9「表象の論理」参照)

栄養・原料・運動

わたくしは環境問題などを解決していくために、物理と生理と認識の理の区別と連関 という論理がもっとも大切であると考えています。これは客観性に主体性を浸透させていく論理です。

世界は時間と空間の統一です。そして過去から現在、現在から未来へ、歴史があります。歴史はすなわち主体度を変化させて物理的進化であり生理的進化であり認識伝統です。

ある範囲の物理的過程を、直接に、細胞ないし細胞団の諸代謝という主体的な論理において把握し直したものが生理的過程です。

神経系の生理的過程を、直接に、感覚・表象・概念の発達というさらに主体的な論理において把握し直したものが認識過程です。

物理的過程の累積が物理的進化であり、生理的過程の累積が生理的進化であり、認識過程の累積が認識伝統です。

世界の物理的進化・生理的進化・認識伝統における流転模様(らせん・黄金比・五角形的)と結晶模様(六角形的・四角形的・三角形的)に着目したいです。

地球表面は一体でありその物理的運動・生理的運動・認識運動には論理的な模様があります。これを地球面模様と呼ぶことにします。地域・海域は地球面模様の部分なのです。

雲が行き水が流れる。地球表面の H₂O 分子団の立体模様の波が進化してきた、進化していく。それとともに、諸タンパク質のアミノ酸など立体模様の分布が進化してきた、進化していく。それがすなわち生物系でありましょう。

人間の健康生活のためにはまず、日光・月光・空気・水・土を原点とする栄

養が必要です。次に、進化する諸道具（生産手段や生活手段）のための原料が必要です。そして運動源^{うんどうげん}というものが必要です。たとえば石炭・石油・天然ガス・ウラン・プルトニウムなどです。これらをわたくしがなぜ運動源と呼ぶか。

エネルギー技術は、運動転化^{うんどうてんか}の技術であり、物質的運動の種類を転化させる技術です。

物質的運動には、物体運動・物体振動^{おと}（音的振動を含む）・熱的活動^{ねつ}・電流・電磁波（光を含む）・化学反応・原子核反応などの種類がありますが、物質的運動のこれらの種類は相互に転化します。たとえば石油と酸素の化学反応にともなう熱的活動という運動を電流という運動に転化する技術が火力発電です。

人間という特異な動物は、自身の姿勢動作と呼吸という運動のみでなく、運動転化^{うんどうてんか}による運輸機械（船・自動車・電車・飛行機・ロケットなど）を用いて空間を移動し、生活や生産において運動転化^{うんどうてんか}による諸機械を用い諸運動を実現しています。たとえば掃除機を用い電流から転化させてチリやホコリが集る運動を実現しています。

諸機械による諸運動の源^{みなもと}が今は石炭・石油・天然ガス・ウラン・プルトニウムなどです。ですから運動源と呼びます。

ただし、たとえば水力発電は、地球表面において水が落下するという運動の物理があり、その水という物体が落下する物体運動を電流という運動に転化する技術です。はじめから地球表面において運動があります。

さて、物理学には場^ば（field）という概念があります。たとえば磁場は場の種類のひとつです。

場とは空間の性質であり、空間の各位置において物質が速度変化する可能性です。（これはわたくしによる規定です。）

地球表面という空間には鉛直方向下向きに物体場（いわゆる「重力場」）があります。地球表面という空間の各位置において物体が（鉛直方向下向きに）速度変化する可能性です。地球表面にあるあらゆる物体は物体場（鉛直方向下向き速度変化の可能性）の実現として落下運動します。たまたま静止している物体においては、物体場と物体場以外の種類の場が相殺しているのです。水力発電は地球表面における物体場の実現の利用です。

ところで、わたくしが父・山田俊郎^{としお}から継承した TQ 技術（JOMON あかのみいサイト『はじまる。』第五章参照）に接していると、物体場・磁場など今までの物理学が規定している場とは、また別の種類の、未知の場がそこにあると、仮説を立てる必要を痛感します。人間社会にとり未知の場があり、運動転化の技術以前に、場（速度変化の可能性）の実現としての運動について、人間社会にとり未知の部分がある。ということは、その未知の部分にこそ、運動

の技術についての希望がある。そのようにわたくしは考えます。未知の場の解明と利用です。

ただし、たとえば将来の核融合技術は、運動転化の技術というより、諸材料を提供する技術の性格が強くなるのでないか？ わたくしはそんな予感がしています。

教養

人間は文字言語という記録と音声言語の記録を介して子々孫々に概念・表象・感覚を伝えることができる生物です。他生物のような遺伝子配列の複製と変化のみではありません。これからの人間社会はさらに、諸記録を01記号（コンピュータとインターネット）を介して集積・統一しようとしています。

現代社会は、資産増殖思想と国民国家思想のもと、01記号による記録と通信と金融を発達させている時代の社会です。しかし、何のための記録と通信と金融か？ 資産増殖と国民国家の軍事のための記録と通信と金融よりは、新しく、世界全人民の健康生活のための記録と通信と金融が望まれ、発達していくであります。

話題の電子マネーは前払金であり、電子マネー所有者の債権です。別に学問的に不可思議なものではありません。

残念ながら、17世紀以降の科学は、世界全人民の健康生活を実現するためには、一面的でした。人間社会はあらためて、健康生活と、栄養・原料・運動確保と、日光・月光・空気・水・土整備のため、総合的な現実論を開拓する必要がある、ということです。環境問題こそは、あらゆる分野に渡る総合的な現実論が必須です。

先に言及したTQ技術をめぐりわたくしが痛感していることがあります。西洋学問と東洋思想のそれぞれにある一面性や部分的架空性を克服し、それらを統合した現実論としての新しい学問が必要となっている。それなくして真の国際的コミュニケーションは成立しえない。そして理想の人生と生活のためには、生物系の進化と人間社会の伝統に学ぶことが基本です。各地域・海域にまつわり生物系の進化と人間社会の伝統に学びやすい建築も大切ではないでしょうか。いわば地球表面の博物館化です。

たとえば著名な福岡正信氏のような自然農法が可能なためには、今までの科学にとらわれない、もうひとつの教養が必要なようです。新しい学問論争を展開しつつ、もうひとつの教養を普及する教育組織が必要なようです。(文献6参照)

そして国家とグローバリズム、戦争とその放棄、日本的創造性、環境破壊と農業再生。日本民族としてこれらの問題を根本的に考えるためにこそ、日本の弥生時代の現実の正しい調査と考察がとても役に立つ。このように主張する考古学者・寺沢 薫氏の研究にわたくしは強く注目しています。(文献5参照)

諸民族の(宗教と言語を中心とする)文化・文明は、根本的に、諸民族が生活してきた地域・海域の気候を反映している、という考え方があります。(文献4参照) 自民族とは別の気候において永く生活する体験がなければ、他民族の生体・情感・情念・思考はほんとうには理解できていないのかもしれませんが。四つ足を食べるな。牛を食べるな。豚を食べるな。魚の刺身は気味悪い。くじらを食べるのは気味悪い。太陽はありがたい。太陽は怖い。さまざまな民族なりにさまざまな想いがあります。しかし、おたがい、自民族の想いを他民族におしつけるのは誤りです。諸民族の想いのそれぞれの必然性を地道に理解しあい、諸民族調和へ向けて思索を深く柔軟にした上においてはじめて、諸個人としての善悪、諸民族としての善悪を判断していくべきです。これが平和の原理です。

たとえば湿った気候で軟水の日本列島における 水 という概念と、乾いた気候で硬水の欧米における water という概念は、微妙に異なるのではないのでしょうか。

温暖多湿なものがしだいに腐りやすい気候において生成した日本文化は、他文化から観れば、神経質なまでに、細やかな文化です。それは善悪以前に、他の気候において生成した文化・文明とは、直接的な比較ができない、ということです。地球表面の気候分布を考慮し、媒介的に比較するべきである、ということです。

そしてたとえば東北アジアの環境保全と開発のため、USA による外政と中華人民共和国による外政がどうなるかと別に、現地民族として、日本・朝鮮・満州・モンゴル・ロシアなどの諸民族がどう協同していけるか？ これは環境問題解決への試金石として重要な案件です。日本の明治維新以降の諸戦争を正しく総括しつつ ...。そしてこれは、ヨーロッパ文化とアジア文化の矛盾を解決していく試みでもあります。

異常気象については、まじめな優れた学者ほど、これからの異常気象について予想できない部分が多い、と言っているようです。まして民衆に予想できるはずもなく、何があっても受け止めるというところ構えこそが、まず大切ではないのでしょうか。

ただし、たとえば地球温暖化より大きな問題は、病的戦争思想であり、石油の有限性であり、微生物界攪乱です。

USA を信奉し石油を前提とした戦後日本の建築も都市も工業も農業も、あと数十年で破綻することは明らかです。砂上の楼閣ならぬ油上の楼閣です。日本社会のもろさは世界の中でもきわだっており、日本社会こそは脱石油革命の総合的な研究開発において先頭を走らなければ大破綻が必至です。

たとえば松という植物は日光・月光・空気・水・ミネラルを栄養とし、油を栄養とすることはありません。しかし、その生命反応により、松根油しょうこんゆという立派な油を生成しています。これは生物学の常識ですが、物理学の立場からは、この生命反応の過程はまだ解明されていません。もしもそれが解明されたら、新燃料の発明ともなります。松の話はごく一例にすぎません。高校生の生物学や化学の教科書において常識とされること、それをあらためて、素朴に物理学の立場からまともに問うてみてください。あまりに多くのことが未知であると、驚かざるをえません。松竹梅と、日本民族が縁起物の筆頭にもした松だが、岩にも根を張り松根油を生成する松 ...。その生理的物理の謎はいつ解けるのか？

人間社会は物理学が過剰なのでなく、物理学（とくに生理的物理学）がまだまだ不足しているのです。

たとえば石炭・石油・天然ガス・核分裂に代る運動確保やたとえば石油に代る原料確保。少し飛躍しますが、むしろ日本列島に多い地震や台風という運動を人間の健康生活のための運動に転化することはできないか ...。太陽光はまだまだ、さまざまに利用できるはずだ ...。太陽系の物理的進化に学び、地球・月系の物理的進化に学び、さまざまな流体運動に学び、より本質的な運動確保をめざしたいものです。

一方、流行りはじめていますが、たとえば有限の石油などを節約する生活や生産、また、CO₂ や CH₄ を出しすぎない生活や生産を想定し実行していくことは大切です。なお、問題の CO₂ や CH₄ という気体を何らかの方法により吸収し問題のない液体か固体の一部として定着させる安価な技術が発明されるなら、それに越したことはありませんが ...。さらに飛躍し、人間社会と生物系にとり問題の物質を集めて宇宙へ放出する技術があるなら、それに越したことはありませんが ...。

健康生活のためには生物系の進化に学び酵素活性の条件をより詳細に把握するべきでありましょう。このあたりは中国の中医学の概念に関連があるかもしれません。すなわち、人間が自身の体内の陰と陽を把握し、自然や宇宙の陰性と陽性を把握する。

人間や生物を相手とし、進化と発生の論理において、相手の個体の生体と認識に同化する。こういう主体的な技能も大切です。

地球表面を利用する。生物系を飼育する。植物・動物・微生物・ウィルス・

諸細胞を飼育する、あるいは改変する。それらの目的が問題です。資産増殖と国民国家の軍事を目的としているのか？ 世界全人民の健康生活と諸民族調和を目的としているのか？

人間の生活空間や人間が食物とする生物の生存空間を害する生物・微生物・ウィルスを直接的に殺すのは得策ではありません。生活空間ないし生存空間の酵素活性場（わたくしによる規定）などを調整し媒介的に有害者を退散させるのが得策です。生物系は全体として連動しており直接的に殺すと不測の反動があるからです。やむをえず直接的に殺す場合は事後に何らかのケアが必要です。

循環

人間社会という特異な生物系は、資本制生産により商品生産を普遍化し、栄養・原料・運動を大きく確保し、結果として、人口（個人数＝人間という生物種の個体数）を大きく増加させました。しかしこれからは、教養の発達、現実論の学問と規範や健康平和な芸術の発達が人間社会の進化の方向です。そしてその伝統と創造を保証する保育・教育のためには、資本制時代のような子だくさんでは無理であり、性交が自主的に調整されることでありましょう。すなわち資本制時代のような人口の大きな増加はなくなる、ということです。

人間社会に普遍的な公会があり特殊な協会があり個別な個人がある。健康平和な恋愛・出産・保育・教育にかかわる家庭も協会の種類のひとつです。健康平和な恋愛・出産・保育・教育のためには各民族伝統を深く踏えた教養が必要でありその教養の普及は公会として行われるでしょう。人間社会は血縁と地縁のみでなく通信縁が発達しているでありましょう。人間社会における労働の交換と商品の陳列の簿記や統計がわかりやすく管理されているでありましょう。人民に休養と労働の喜びを提供し伝統と創造の喜びを提供する教養の商い、すなわち保健商人道が発達しているでありましょう。労働は人間において認識運動と生理的運動と物理的運動を総合したものです。全人民の労働が健康平和に組織されているでありましょう。

以上は諸国家が止揚（内容は保存し形式は否定）されたあとの遠い将来の人間社会をわたくしが想像したものです。ジョン・レノンの 想ってごらん という平和への祈り、イマジンをわたくしなりに継承し発達させました。人間社会は原始の素朴人間調和が否定され民族・国家闘争が続いていますがいずれそれを否定し将来の諸民族調和がある。人間社会には 調和 闘争 調和 という否定の否定がある。日本列島の縄文遺跡は原始の素朴人間調和と関係していると考えられるから、将来への調和復活を、わたくしは縄文るねっさんすと称

します。(外来語もひらがな表記し日本発ということを表示する。)

将来の想像から現在の現実にもどり、資本制社会の矛盾はふたつあります。

ひとつの矛盾は生産面において、私的所有と社会的生産の矛盾 というものです。私的に所有されている大企業が社会的に(国際的にまで)広範な影響を与えている、という過渡期の事態です。何が問題か? 金融と現実論経営権の矛盾 というように、具体化できます。株式会社にしても協同組合にしてもNPOにしても、金融(融資・投資・寄付)と経営権が未分離であり、架空論の経営か、現実論の経営か、それが金融者(とくに投資者)により左右されてしまう、という問題です。架空論をしないで現実論にしてきた、していく、経営の試行錯誤ないし実験が、より着実に累積されていくようにする。そのため、金融者が現実論経営者に対して優位である状態から、現実論経営者(現実論経営権)が金融者(債権ないし寄付の恩)に対して優位である状態へ、転換していくべきです。現行諸制度のもとにおいて、あるいは諸制度を改革していく議会制民主主義において、この転換を追求していくべきです。この転換を通して、現実論経営のための生産手段をしないで公有化・共有化していくべきです。生産の目的は資産増殖でもなく国民国家の軍事でもありません。生産の目的は世界全人民(すなわち、おたがい)の健康生活です。そのための保育・教育・保健・看護・医療です。とくに保健です。人間(おたがい)に健康な生活(休養と労働)ないし健康な人生(伝統と創造)以上の目的があるのでしょうか。病的戦争教育と保健統制でなく、健康平和教育と保健を結果する諸生産において、しだいしだいに諸個人ないし諸民族の生活調和を追求していくべきです。

資本制社会のもうひとつの矛盾は貨幣面において、搾取と購買力不足の矛盾 というものです。資本制生産の本質は、労働力からの剰余労働量の搾取です。もちろんその搾取は、国民国家の労働法その他のもとに合法的に行われています。世界市場競争においてこの搾取を累積すると、結果として、世界の労働者その他の貧困階級の消費支出において、健康生活化への欲求は強烈にあっても、貨幣(消費権)が不足します。(すなわち、有効需要が成立しません。)その不平不満を、資産増殖思想と国民国家思想に対するイスラム教その他の思想自覚において、テロその他の形態において発散させても、問題は解決しません。暴力思想そのものが、世界資本制社会の名残りです。まず健康平和教育と保健を結果する諸生産をしないで発達させる。次に健康平和教育と保健に対する購入費用(消費権)を富裕階級から貧困階級へ寄付する。このように、社会的な搾取に寄付を調和させる階級循環、すなわち寄付込^{こみ}市場制度の創造こそが、本質的な解決の道です。その核心は健康平和教育と保健に対する

る購入費用（消費権）としてしか活用されない信用ある寄付、信用寄付 です。そのための制度と IT の創造です。この創造はまず、円建てにおいて始めたいものです。

地球にやさしい、環境にやさしい、は悪くありません。さらに、人にやさしい、とくに世界貧民にやさしい、道徳運動と経営運動と政治運動を考えたいですね。生理循環（植物・動物・人間・微生物の循環） や物理循環（原料・運動の循環） 以前に、労働循環（搾取と寄付の循環）があるのが、ほんとうの循環型社会でありましょう。

たとえばペットボトルのリサイクル問題も、当初は善意であったのに、大局的な現実論が不足していたため、結局、無意義な利権構造を生成したのみ、ということであるかもしれません。（文献 14 参照） 石油から生成したプラスチック諸製品を使用後に、良質な油に安価にもどす社会的物理的な技術が発明されれば、それに越したことはありませんが …。

諸国家への税金や諸国際機関への寄付金を獲得するためならどんなまやかしの議論も横行している世相です。CO₂ など削減の国際合意と排出権市場という試みも、歴史的な大局的な現実論を踏えより有意義な活動となるよう祈ります。なお、環境問題の一部には、地球外主体（いわゆる「宇宙人」）の問題が関与している、という説もあります。本稿執筆時のわたくしには、その説について批評する準備がありません。

環境問題こそは熱狂禁物です。今までのあらゆる学問を動員しても不足するぐらいであり、これほど冷静に冷徹に縦横無尽に思索し、沈着に大胆に多様に行動すべき問題はほかにありません。浮ついた議論の一切をわたくしは敬遠いたします。まあ、日本語の風流を解さずして環境問題の解決なし、とでも言っておきましょう。百人一首より月と雪と風と花と鳥です。

あま はら かすが みかさ やま つき
天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも
たご うら しろたへ ふじ たかね ゆき
田子の浦にうちいでてみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ
ふ あき くさき やまかぜ あらし
吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ
ひさかたの ひかり はる ひ ごころ はな ち
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
あはぢしま ちどり な こゑ いくよ ね ざ すま せきもり
淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

やすらげ。地球人。

〔文献〕環境問題を解決していくための文献は数多くありますが、わたくしとしてはまず、次の文献に注目しています。(ただし、これらの文献の主張に 100%賛成しているわけではありません。)

- 1 今西錦司 『生物の世界』(講談社文庫 1972 年)
- 2 今西錦司 『生物社会の論理』(思索社 1971 年)
- 3 今西錦司 『私の進化論』(思索社 1970 年)
- 4 川喜田二郎 『環境と人間と文明と』(古今書院 1999 年)
- 5 寺沢 薫 『日本の歴史 第02巻王権誕生』(講談社 2000 年)
- 6 福岡正信 『自然農法わら一本の革命』(春秋社 1983 年)
- 7 久司道夫 『マクロバイオティック健康法 - 正食のすすめ』(日貿出版社 1979 年)
- 8 庄司和晃 『認識の三段階連関理論』(季節社 1992 年増補版)
- 9 ヘーゲル 『歴史哲学講義(上)(下)』(長谷川 宏訳・岩波文庫 1994 年)
- 10 西澤潤一・上野勳黄 『人類は 80 年で滅亡する「CO₂地獄」からの脱出』(東洋経済新報社 2000 年)
- 11 ジェームズ・ラブロック 『ガイアの復讐』(秋元勇巳監修・竹村健一訳 / 中央公論新社 2006 年)
- 12 アル・ゴア 『不都合な真実』(枝廣淳子訳・ランダムハウス講談社 2007 年)
- 13 永延幹男 『炎の村へ自己回帰への探験』(たま出版 1986 年)
- 14 武田邦彦 『環境問題はなぜウソがまかり通るのか』(洋泉社ペーパーボックス 2007 年)
- 15 武田邦彦 『環境問題はなぜウソがまかり通るのか 2』(洋泉社ペーパーボックス 2007 年)
- 16 金子仁洋 『地方再興官と族議員は地方の敵にまわるか』(マネジメント社 2007 年)